

オーストラリアにおける能の受容 A Study of Noh Reception in Australia

ウォータース 雅代

WATERS Masayo

Japanese Noh is an art of beauty and discipline. It is not easy to understand Noh just because you happen to be Japanese. It has many things that must be learned to enjoy the crystallized Zeami's wisdom. In the beginning of the Meiji era when Noh faced a crisis of its subsistence, many occidentals found how fascinating Noh was. As it gave them a very strong passion to translate Noh in order to introduce it to their homelands, Noh has something that comes close to being spiritual, something which is universal. Modern Australia started its history as a British colony, at the same time it meant the end of a history for the Aboriginal land. Allan Marett made *Noh Eliza* from a story of Eliza Fraser, a legend from the colonial time. Marett translated an Australian historical story into Japanese Noh using Aboriginal music and culture. It is a wonderful piece of art that shows how Japanese Noh has been received in Australia. The aim of this paper was to consider a study of Noh reception in Australia.

はじめに

筆者は本大学院で文化情報を専攻し、上田邦義先生（以下宗片と記すが、宗片に限らず以下すべて敬称略）¹の「比較文化・文学特講」の授業で、日本の伝統芸能の一つである能楽に触れるチャンスを得た。この素晴らしく美しいものが一般的に知られていないのは残念な事に思われた。能楽、なかでも夢幻能と世阿弥²が名づけた能に、スピリチャルなものに興味をもっていたので特にひきつけられた。また、筆者は日本人の海外での評価を高める為には、日本人自身が自信を持って自国の文化に誇りを持つべきであると考えてきた。日本には素晴らしい歴史と伝統があり、文化があるのだが、日本語で海外へそのまま伝える事が現状ではあまりなされていない。日本では英語の学習に力を注いできたので、英語で

入ってくる文献を受け入れ日本語に訳し紹介する事が可能であるが、日本から何かを世界へ向けて発信するという事を考える時、日本語のままで発信してそれぞれの受信先の各国の言語に翻訳される事を期待するよりは、英語を伝達手段とするほうが効率的である事は明らかである。

英語能という新しい試みは、この日本伝統文化の粋とも思われる能楽を世界に発信する素晴らしい芸術であると確信した。

1 英語能・シェイクスピア能

オーストラリアの能の受容を研究する第一歩は宗片の英語能に触れた事であった。宗片は、英文学教授であると同時に、シェイクスピア能という新分野を開拓し世界へ向けての能を発信している。宗片の活動は創作公演・演出、講演など国内外で非常に幅広く多数行われているが、以下は其中でオーストラリアでの活動に関するものである。1994年2月から3月、宗片は「英語能・ハムレット」(Noh Hamlet in English)研究発表と公演を、オーストラリア・ニュージーランド・シェイクスピア学会で行っている。シドニー日本文化センター、メルボルン大学、ラトロープ大学では「英語能：ハムレット/リア王」(Noh Hamlet in English/Noh King Lear in English) 公演を行い、国立芸術大学(NIDA)、西オーストラリア大学、アデレード大学、ほか3か所で「能独演：ハムレット」(Noh Hamlet as Sole-Performance)を行った。³

1994年西オーストラリア大学で行われたオーストラリア・ニュージーランド、シェイクスピア・アソシエーションの第3回シンポジウム(the third symposium of the Australian and New Zealand Shakespeare Association)において、パフォーマンスのほかに行われた受容に関する講演の一部を紹介する。

レクチャーデモンストレーション：『能 ハムレット』⁴

Lecture Demonstration: *Noh Hamlet*

ご存知かもしれませんが、能では非常に清潔な板張りの舞台が、白足袋ですり足で登場の演者のために要求されます。舞台はとてもきれいですので、たとえ一時間ほどの能演技の後でも、足袋は演技前のように白くきれいです。汚れたのなら洗えばまた

きれいになるだろう、とおっしゃるかも知れません。確かにそうですが、白足袋がかつては汚れていたという事実は変わりません。それだけではなく、一度汚れた白足袋は以前の状態には戻らないかも知れないのです。実際のところ、元のようにはなりません。私が強調したいことは、清潔さだけではなく、むしろ私たちの経験が一度限りであるという事、それぞれの経験の単一性とそれが唯一無比であるという事です。能では、同じ役者達で同じ演目を行うことは決してありません。この事は日本の美学的感覚と関係が在るのかも知れません。この事を日本の他の伝統芸術、毛筆画、茶道、華道、庭園などのようなもの、または生活態度にさえも見ることができるかも知れません。いずれにせよ、そういう訳で、特別な舞台が私のために用意されてあるのです。

5

宗片は能の役者が舞台ではなく白足袋を例に、能をはじめとする日本文化の美意識に触れている。この西オーストラリア大学でのパフォーマンスのため宗片は白い丈夫な紙を持参していた。ステージの上に敷いて即席の能舞台を用意する目的であった。⁶ しかし上記に続けてこのように述べている。

しかしこの舞台を気に入りました。能シェイクスピアは日本の芸能に西洋劇の台詞を合わせたものであるから、この西洋式の舞台で私の能デモンストレーションを適合させようと思いました。⁷

世界のより多くの人々に能の素晴らしさを知らせ、理解を深めるためには、このような英語能と英語による講演が必要不可欠である。

2 『能イライザ』(*Eliza*) との出会い

オーストラリアにおける能の受容を調査するために、まずオーストラリアで出版されている能に関する文献を調達しようと調査した。オーストラリアで日本語関係、または演劇関係の科目のある教育機関で、教育者または研究者として従事している人たちに、手当たりしだいにオーストラリアにおける能の受容に関する文献、資料のことをメールで尋ねた。結論から述べると、筆者が尋ねた誰もが、そういうものはまだないであろう、と答えた事

である。幸運にもラトロブ大学のイアン・カルザース(Ian Carruthers)という、アジア演劇や日本文化を教えている教授から返信メールが来た。カルザースは宗片のことを知っている人物であり、このことで筆者は非常に助けられた。彼は、宗片がその出版によせて価値ある文を寄稿した*Performing Shakespeare in Japan*の共著者の一人である。オーストラリア人が製作した『イライザ』という新作能のビデオ・テープ、シドニー上演のプログラム、『イライザ』のモデルになった実在したイライザ・フレイザーに関する資料などをお送り頂いた。日本在住のアメリカ人リチャード・エマート⁸ (Richard Emmert)、喜多流の松井彬⁹ が参加し、1989年、シドニー大学で学生も加わった英語能の上演があった¹⁰ ということがわかった。

3 イライザ・フレイザー(Eliza Fraser)

イライザ・フレイザーは19世紀、オーストラリアに実在した人物である。¹¹ 1836年5月22日 イギリスの船、スターリング・キャッスル号(Stirling Castle)は、スワインの岩礁に衝突。船長のジェイムズ・フレイザー(James Fraser)56歳、妻イライザ37歳、妊娠中であった。船員は避難用のボートを出した。32日後、イライザの赤ん坊がその中で産まれ死亡したボートで、ウェイディー岬北部にそれが島であることを知らずに到着。その後一年余りをアボリジニと生活したが、その間ほかの生存者たちは死亡しイライザー一人がシドニーへたどり着いた。祖国英国へ戻り、自分の波乱万丈の物語をして生計を立てた。¹²その後またオーストラリアに戻り1858年メルボルンで事故死(轢死)を遂げた¹³。

1995年11月25日と26日にアデレードで開催されたイライザ・フレイザーに関するシンポジウムの広告用印刷物のコピーを紹介する。1995年11月25日-26日、アデレード大学、女性研究学部主催のシンポジウムで植民地時代以降の小説：イライザ・フレイザーとスターリング・キャッスル号の難破を再読するものであった。

1836年クイーンズランド沖の島、フレイザー島に難破船スターリング・キャッスル号から生存者たちが、漂着。船長の妻フレイザー夫人と多くの船員である。このフレイザー夫人の難破漂流からの生還事件は、この時代、国際的にも関心を引いた大事件であった。それ以降約160年間、イライザ・フレイザーの物語は、よく知られた伝承の主題となり小説、

オペラ、詩、戯曲、ドラマ、芸術、映画、が生み出されてきた。そして女性学、文学、歴史、人類学、考古学という領域での研究対象、視覚的創作芸術の対象としても扱われてきたのである。¹⁴

オーストラリアはかつてイギリスの植民地であったが、それ以前は他国から遠く離れた、アボリジニと呼ばれる原住民が住んでいる国であった。1768年、キャプテン・クック (James Cook) が一度目の航海に出て1770年4月ボタニー湾に上陸し¹⁵、8月ボゼッション島でオーストラリア東部の領有を宣言し、ニューサウスウエールズと命名。¹⁶その後、イギリス政府は、オーストラリアを流刑植民地としてスタートさせた。1793年には、最初の自由移民と呼ばれる人たち、すなわち自らの意志で新天地を求めた人々が到着し¹⁷、同年、最初の教会が建てられた¹⁸。前出のシンポジウムでは、事実に関する西洋人の見解とアボリジニの見解とについて話し合い、19世紀の植民地時代の公的記録の資料¹⁹をもとに検証を試みた。アボリジニの記録というのは、口述によりそれぞれの部族に語り伝えられているものや、伝説となっているものである。また映画、ドキュメンタリー、絵画、小説などの最近の事象に関する意見の交換を行った。²⁰

イライザについて知られている事は、異なった内容の二つの評価があるという事である。ひとつは、イライザの難破後の受難の物語である。アボリジニに捕らえられ、あらゆる残虐な仕打ちと侮辱を受けたという物語を、文明社会へ戻ったイライザは、自ら語った。シドニー、メルボルン、ロンドンの3箇所でのその悲惨な奴隷であった生活を人々に話した。もう一つは、イライザの話は作り話で信憑性にかけている、という物である。生還後彼女が3箇所では話した3つの物語はどれも、アボリジニの残虐性と彼女が受けた扱いをセンセーショナルに語ったもので、その内容は矛盾に満ちていたという。アボリジニを知る白人たちは、イライザの話の信憑性に早くから疑問を持ったと思われる。文明とは縁のない過酷な大自然と向き合って暮らすアボリジニが住むオーストラリア沖の小さな島で、難破したイライザを部族は容認し、それ故に彼女は生き延びる事ができた、彼女は生かされたのだ、という物である。²¹

このシンポジウムで公開された19世紀の記録²²を読むまで、筆者は、イライザが売名目的で架空の話をしたと考えていた。その背景には、多くの白人が意識せずに持っている、

アボリジニに対する白人優先意識があり、当時イライザの話が公開の度に異なっていたというも、彼女はそのつど聴衆が望んでいた物を敏感に察して、いつの間にか誇張して話していたからではないかと考えた。白人が信じたかった物語、または聞きたかった物語というのは、野蛮人に捕らえられた白人女性のセンセーショナルな内容の物語であったからこそ、話がエスカレートしていったのではないかと、という考えである。彼女が語った場所というのは見世物小屋で、客は木戸銭を払って話を聞きに来たのであったという。しかし白人側の記録と、語り伝えられているアボリジニの話の両方、そしてアボリジニの特異に思われる慣習や、難破からイライザが帰国するまで生活した様子の記録などを網羅して考察すると、異文化間の見解の相違こそがこの事件の最大の問題点であると信じる事ができる。白人がアボリジニを誤解しているように、アボリジニもまた白人を誤解していた事が、イライザの物語の元凶であると考えられる。イライザの語った物語は真実ではないが、彼女がその様に作話に至ったというその背景も理解できないとは言えない。

4 事実の記録

1977年2月、クイーンズランド大学の歴史学部に受理されたレイモンド・エヴァンス (Raymond Evans) とジャン・ウォーカー (Jan Walker) による文書である。²³

1770年5月20日、夜10時、キャプテン・クックの航海日誌に、彼はアボリジニに関する記述を残している。

望遠鏡で島を見て、原住民たちがクックの船のほうを見ているのに気づいたことを書いている。クックはこの島人が立っていた場所をインディアン・ヘッド (Indian Head) と名づけた。当時の白人にとってインディアンというのはすべての原住民を示していた²⁴。

当時多くの船員が航海中日記をつけていたが、このクックの日記だけが、アボリジニに関する記述をしている。²⁵ ヨーロッパ人にとって、アボリジニは興味の対象にはならなかったという事がこの記録から判断できる。クックも、キャプテンという立場と、新天地に命名するという事が許されている立場でなかったなら、アボリジニのことなど、記憶にとどめていなかった可能性もある。前出のクイーンズランド大学の歴史学部にある記録から

アボリジニの口述の英語訳をみると、大事件であった。アボリジニに伝わる話とその詳細を告げている。エドワード・アミテージ(Edward Armitage)という人物が島人から、その後何年も経過してから聞いた事として、記述されている²⁶。アボリジニにとっては、巨大なペリカンのような船という文明の利器を見るのも、白人を見るのも、初めての事であった。島の近くを通過する船に近寄ってみると、一人の男が舵を取っているのが見えた。船はキャプテン・クックのエンデバー号(Endeavour)であった。アボリジニは興奮してこの船の進路を追って島を移動し、ブラック・ブラッフ岬(black bluff head)またはポイント・オブ・ランド(point of land)と呼ばれる島の端まで行き北へ向かう船が見えなくなるまで船を見ていた。²⁷ 島には南部に住む部族、北部に住む部族、中央部に住む部族の3部族がいたが、彼らはこの出来事を、詩や歌にして伝えた。その詩²⁸は死者に結びつく彼らの言葉である、煙、蟹のように砂に体を埋めるなどの表現を使い、死者の霊魂が船にのってどこへ行く、という内容である。

この記録により、この海辺に住むアボリジニが、始めて見た白人をどのように考えたのかという事を考える。彼らは船に乗った白人たちは、皆、幽霊で死者の国へ行っただと考えていた事になる。蟹のように体を埋めるというのは、この部族は、死者を砂浜に埋葬したので、蟹が穴をほって体を埋めるように、という表現は死や墓を示す。アボリジニは死者を土葬するが、土葬にする前に、全身の皮膚をすっかり剥いでしまい、皮下脂肪に包まれた白い体にしてから埋葬するのだという。この埋葬前の慣習を知ると、アボリジニにとって、初めて見た白い皮膚のヨーロッパ人を、まるで甦った死者かまたは幽霊である、と信じたというのも理解できる。²⁹ 彼らは、埋葬の次の日に、死者の霊が家へ戻ると信じていた。遺族は、住んでいた場所に火をつけ、これ以上耐えられなくなるまで煙のたつ家に留まり、霊が戻ってきて人々を脅かすのを防いだ。最終的には、村全体が戻ってきた死者に見つからないようにという理由で、ほかの場所へ移動していくのだ。アボリジニの伝えによると、死者は皆同じ場所へ行くのだ、と信じていた。更に、霊の中には特別な力を持ち村へ戻ってくる者もいるのだ、と信じていた。その様な霊は、恐れられたが同時に敬われたという。³⁰ 当時の教会の記録によると、彼らは霊の存在を信じ、死者の名前を、その人の死後再び発音することすら厳禁であった。名前を口にすると、それを聞いた死者が戻ってくる、と信じていた。いかに彼らが、霊を恐れていたのかという事を理解できる。彼らは、イライザたちを、村へ戻ってきた霊だと信じたのであろうか。

5 『能イライザ』のプログラム

以下は1989年9月4日から6日まで上演された“ELIZA”の劇場用パンフレットの一部である。³¹ 『能イライザ』のほか『玉葛』『猩々』『経政』『邯鄲』なども上演されたが、ここでは『能イライザ』以外の詳細は割愛する。

表紙 シドニー大学 演劇科と音楽科による「能の夕べ」

演出 松井 彬³² リチャード・エマート³³

脚本 アラン・マレット³⁴ (Allan Marett)

音楽 リチャード・エマート 振り付け 松井 彬

シモア センター 階下劇場 1989年9月4日 - 6日 午後8時

能は600年前に日本に生まれた舞劇である。現在も東京、大阪、京都、日本各地で公演されている。松井氏は、プロの喜多流の演者でシテと呼ばれる主役を演じる。松井氏は個人でも、一座の座員としても数多くの公演を、アメリカ、カナダ、インド、ヨーロッパで行い、オーストラリアは3度目の訪問である。エマート氏は日本に16年間住み、能の動きと音楽を研究しており、東京で定期的に演奏活動を行っている。エマート氏は松井氏とともに日本国外での講義も行っており、今回2度めの来豪である。

イライザは、正式な能の演目のレベルとその伝統を引き継いだオーストラリアの独自の演目である。多くの日本の能劇の様に文学やその他多くの題材を背景にして描かれた。二つの異なった手法が明らかである。一つはイライザを犠牲者、野蛮人に捕らえられた気の毒な白人女性、という見方をする。我々の価値観に対して脅威と思われる過酷な自然環境と、我々には不可解な文化全体への隠喩的な犠牲者である。もう一つは、イライザを神がかり的な人物、つまりこの国固有の知恵の伝説を管理する者達（アボリジニ）³⁵のスピリチュアルな土地を通過する事を容認された者である、という見方である。

この二部両断方が、イライザを構成している物の根源なのである。多くの日本の能の演目と同様に、2場からなる。前場は、過去の間違った見解や行いの結果として亡霊という姿になった主人公に焦点を当てている。後場では、亡霊の姿から解放され

た主人公がその本来の姿を現す事ができる。前場では、イライザはその「犠牲者としてのイライザ」という伝承により捕われ亡霊の姿になっている。(後場で)彼女の真の姿がフレイザー島でのアボリジニの中での彼女の体験を証言し、真実を話し、それによって解脱する。せりふの言い回し、音楽、舞いは、能の伝統的な部分に密接に迫っている。伝統的な登場場面での音楽(次第)にのって、後場の登場人物(ワキ)が登場し、自己紹介(名乗り)をする。次に旅の歌(道行き)を謡う。主人公(シテ)が音楽(一声)にのり登場する。後場では、シテは囃子という楽曲にあわせ舞う。

プログラムは、実際に1989年9月4日から6日までに、会場にて配布されたものである。筆者の手にあるのは、そのコピーである。表紙の上部に手書きで上演時間が記入してある³⁶。それによると、『イライザ』は5日、1時間18分、6日1時間21分上演された。

6 ビデオ収録『能 イライザ』を観て

最初に、目の見えない旅人(ワキ)が登場。次に、地味な衣装の、老女のように見える面をつけてシテが登場し、ロンドンのハイパークにある見世物テントで昔語りをするものであるという、船の難破の話をし始める。ハイパークのテントで、島での体験を語る昔語りだという。アイにたずねられ、シテはアイに話し始める。アイはその物語は、本当かと、たずねると、嘘をついていたというのである。シテは彼女がアボリジニから受けた残酷な扱いは、嘘であるという。アボリジニの祭りで生贄にされるどころだったイライザを救ったのは、天使の羽を持つアイルランドのグラハムの亡霊だという。老女が退場後、歌いながらアイ狂言が登場。旅人はアイとの会話でイライザの亡霊がこの浜には出ると聞き、先ほどの老女はイライザの亡霊であったかと気がつく。アイの旅興行の呼び込みらしき男が、先ほどの老女が話していた様な事を大きな身振りで話し聞かせるが、旅人は信じていない。イライザの話は嘘だったと言い、アイ狂言は憤慨して退場。第2場で、地謡がアボリジニのリズム、または何かの呪文のように謡うと、若い女の面をつけ冠もつけた白い衣装のシテが橋掛かりに現われる。巫女のようにアボリジニの祭りで踊る、これによってイライザは解き放たれたという印象を与え退場する。

まとめ

能の魅力の一つは霊的な部分であろう。能舞台と舞台裏は橋掛かりという通路でつながっているのだが、この細い廊下が、あたかもあの世とこの世を結ぶ廊下か橋であるかのようになり、シテは登場し、退場し、扮装を変えてまたこの橋掛かりを進んで登場し、橋掛かりに消えてゆく。シテが後半で消えていくときには、後半で登場のとき既に扮装を変えているとはいっても、前半で登場した時の姿から投影されたおぞましい内面や心理状態では既になく、救済されたような印象を見るものに強く与える。死者の回想により始まった物語が、亡霊になりこの世に固執していた理由になるような事情を再現し、再現しながらそのシテ自身を見つめているような視線があるように感じる。そこから生前その渦中にいた時には見えなかった何かを、その視線は読み取るのだろうか。過去を再現し、受け止め、達観する事により、一つのところに囚われて亡霊になっていた魂はそこから自由になり救われるのであろうか。観客もまた、擬似的な霊的体験を、能によって体験し、それによって救済されるという不思議な体験をするのではないだろうか。能が今まであり続ける大きな理由の一つ、または人を引きつける不思議な理由の一つは、能が非常に霊的な部分を持つという事、人間の根源的な部分に迫るものがあり、意識や無意識、人種や言語を超えた何かがあるからではないだろうか。

今回オーストラリアにおける能の受容を研究テーマにして調査するうちに、思いがけず、能がもつ霊的なものを強く認識する事になった。能には癒しの作用があるという考え方である。イライザの伝承は癒しを求め、能になった。イライザは自分を亡霊としてこの世に存在させる原因となった彼女の人生を回想する事で、自らを解放する事ができる。白人が行ってきたアボリジニへの行為を隠された場所から明るい現在に取り出して、過去の罪の清算をするような意味もまた『能イライザ』は示しているという解釈が成り立つ。面、装束など日本の能そのままに、アボリジニの音楽と文化を融合させ、植民地時代の白人とアボリジニの関係を夢幻能の形式で英語能に仕上げている。1989年は建国200年を経過した後の年であり、新たな一世紀へと入った時である。つまり白人の搾取の歴史を回想し、罪を清算しひとつの節目となったと言えるのではないか。

『能イライザ』は、オーストラリアの歴史とアボリジニ文化と日本の能を見事に受容した結果であると考えられる。世阿弥の夢幻能は『能イライザ』でオーストラリア史に影を

残してきた白人とアボリジニの暗い歴史的事実を、救済したのではないだろうか。『能イライザ』は受容のひとつの証明となりうると考察する。

今回の研究を通じて、筆者は数人ではあるが、オーストラリアでアジア演劇や日本語の指導をしているオーストラリア人に出会う事ができた。能に興味を持つ人たちである。これは筆者の今後の、オーストラリアにおける能の受容への更なる研究継続にとって、素晴らしい出会いである。心から感謝している。

註

¹ うえだ(むなかた)・くによし 上田邦義博士 筆者のゼミの指導教官。過去の舞台・著作活動では宗片姓。山形県出身。1964年、東京教育大学修士課程(英文学専攻)卒業。1973-75年、フルブライト研究員(ハーバード大学)。著書に『ホップス』(中央公論社)世界の名著・共訳、『英語能・ハムレット』(研究社出版)、『シェイクスピア名場面集』(北星堂書店) *Essentially Oriental: R.H. Blyth Selection* (同) などあり、また英語能『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』『創作能クレオパトラ』を創作、自らシテを演じ、米・英・カナダ・スウェーデン・デンマーク・オーストラリア・香港などの大学や劇場で講義、公演。日本語口語能『オセロー』『大僧正トマス・ベケット』を創作・演出。

² ぜあみ、室町初期の能役者、能作者。大和猿楽結崎座(後の観世座)2代目の太夫。幼名、藤若。通称、三郎。名は元清。父観阿弥の通称観世のなでも呼ばれ、法名は世阿弥陀仏(世阿弥・世阿)。『風姿花伝』『花鏡』ほか多くの著者。夢幻能形式を完成させ、多くの能をつくり、詩劇を、創造した。(1363~1443) 『広辞苑』p1458

³ <http://www002.tokai.or.jp/noh/japanese.html> 英語能・シェイクスピア能。現代口語能 ホームページ参照 2003年、6月10日訪問

⁴ Ueda, Kuniyoshi

Noh ADAPTATION OF SHAKESPEARE-Encounter and Union; HOKUSEIDO, 2001, p150 Lecture Demonstration: *Noh Hamlet*

For a Noh performance, as you may know, a clean, very clean, wooden stage is required, on which performers slide in white *tabi* socks. The stage is so clean that even after an hour's performance, the *tabi* socks are as clean and white as before. You might say that if the socks got dirty, why not wash them; they will be as clean as before. You are right, but the fact remains that the white *tabi* have been dirty once. Not only that, once they have been dirtied, they may not return to their previous state. And they usually do not. What I want to emphasize is not only the cleanliness but

the ‘onceness’ of our experience, meaning the singleness or uniqueness of each of each experience. In noh, the same program by the same performer is never repeated. This may be related with the Japanese sense of aesthetics. You may see this in other Japanese traditional arts-brush painting, tea ceremony, flower-arranging, gardening and so on-or even in the attitude to life. Anyway, that is the reason why a special stage has been prepared for me.

⁵ 同上、筆者訳

⁶ 同上、p150

⁷ 同上、p 150 筆者訳

But seeing this stage, I liked it. I thought I should adapt my noh demonstration to this Western stage, for noh Shakespeare is concerned with adapting Japanese theatre to Western text.

⁸ エマート・リチャード アジア音楽と演劇を教える, 武蔵野大学教授(旧武蔵野女子大学), 73年以來能を研究し自らも演じてきた。専門は能の音楽で、英語による能の作曲(イエイツ『鷹の井』、パイチマン『漂流』)や編曲・補作(リトル、ホルヴィック『聖フランシス』)がある。松井彬とともに海外への能の紹介にも努め、シドニー大学(オーストラリア)やアラーム大学(アメリカ)、国立演劇学校(インド)、ミュンヘン大学(ドイツ)等で公演や指導、ワークショップの開催等を行ってきた。『能イライザ』でも作曲。『イライザ』東京公演時のパンフレット参照 1990年。註120参照。

⁹ まつい・あきら 喜多流シテ方。故郷の和歌山のほか、大阪や東京で定期的に公演し、後輩の指導に当たる。海外への能の紹介にも積極的に役割を果たし、アメリカのスミス大学、オーストラリアのシドニー大学、ドイツのミュンヘン大学等で講演や指導ワークショップ開催など。註119参照

¹⁰ 『能イライザ』1989年シドニー大学にて初演上演 アラン・マレット作

¹¹ The Rescue of Elizer Fraser, Noosanet, <http://www.noosanet.com.au/history/elizerfraser/> より筆者大意 2003年10月1日訪問

¹² 『イライザ』東京初演公演(1990)のパンフレット

¹³ Walkabout, Australian Travel Guide, <http://www.walkabout.com.au/locations/QLDFraserIsland.shtml> 2003年10月1日訪問

¹⁴ 筆者大意 “Post-Colonial Fictions: Re-reading Eliza Fraser and the wreck of the ‘Stirling Castle’” Symposium, Department of Women’s Studies, University of Adelaide, 25&26 November 1995”

¹⁵ 『概説オーストラリア史』 pp360-361 オーストラリア史略年表より

¹⁶ 同上、p26

¹⁷ 同上、p26

¹⁸ 同上、p26

¹⁹ “Occasional Papers in Anthropology” Number 8, Department of Queensland, Manuscript received February 1977

²⁰ 前出のシンポジウム広告用印刷物

²¹“Occasional Papers in Anthropology” Number 8, Department of History, University of Queensland, Manuscript received February 1977

²²“Occasional Papers in Anthropology” Number 8

²³ 同上

²⁴ 筆者大意

²⁵“Occasional Papers in Anthropology” Number 8

²⁶ 同上

²⁷ 同上

²⁸ 同上、筆者大意 These strangers, where are they going? Where are they trying to steer? They must be in that place, Thoorvour, it is true. See the smoke coming in from the sea. These men must be burying themselves like the sand crabs. They disappeared like the smoke.

²⁹ “Occasional Papers in Anthropology” Number 8

³⁰ 同上

³¹ 筆者訳

³² まつい・あきら 昭和27年喜多流職分和島富太郎に師事し、満7歳で大阪大槻能楽堂において初舞台をつとめる。昭和34年喜多流宗家喜多実の内弟子となり、昭和42年東京・和歌山において喜松会を発足。昭和43年能楽協会会員となる。以後和歌山能楽鑑賞会、日前宮薪能、市民能、県民能、吉宗祭薪能、万葉薪能に尽力。http://www.hall.city.wakayama.wakayama.jp/13_shihou/13/11/page/200111_4.htm

2003年11月12日訪問

海外への能の紹介にも積極的役割を果たしアメリカのスミス大学、コロンビア大学、ミシガン州立大学、ウィスコンシン大学、アールラム大学、オーストラリアのシドニー大学、インドの国立演劇学校(ニューデリー)、西ドイツのミュンヘン大学等で、公演や指導、ワークショップの開催を行ってきた。ミネアポリスの21ストリート・プレイヤーズによる『芳一』および『羅生門』(いずれも松井彬脚色)では演出を担当した。『イライザ』東京公演パンフレット1990年5月28・29日

³³ エマート、リチャード(Emmert, Richard)1949年、米国オハイオ州生まれ。1968年アールラム大学入学、東洋史、日本語専攻。1972年卒、その間早稲田大学に留学し、尺八を習い始める。1973年再来日、その後東京芸術大学音楽部研究生となる。能と出会い、謡、仕舞い、笛、鼓など習い始める。現在武蔵野大学教授として能楽を教える。<http://dynabook.com/pc/museum/insight/004/body1.htm> 2003年10月20日訪問。

³⁴ マレット、アラン(Marett, Allan)シドニー大学教授(音楽)、オーストラリアの民族音楽学者。日本の伝統音楽(特に雅楽)とオーストラリアのアボリジニの音楽を専門とし同時に長年にわたって禅を实践。仏教哲学とアボリジニの伝承を結合するユニークな思想で注目される。『イライザ』東京公演パンフレット、1990年5月28日・29日。

³⁵ (アボリジニ)筆者加筆

³⁶ ラトロープ大学（オーストラリア、メルボルン）のイアン・カルーザス教授が、その他の資料とともに筆者に送付されたもの。

【参考文献】

引用資料

川村 ハツエ 『能のジャポニスム』七月堂、1987

小林 貢・増田正造 『能の歴史』平凡社、1976

サン・キョン・リー著、西 一祥監修、田中 徳一訳 『東西演劇の出会い - 能、歌舞伎の西洋演劇への影響』新読書社、1993

杉本 良夫 『オーストラリア - 多文化社会の選択 - 』岩波書店、2000

関根 政美・鈴木 雄雅・竹田 いさみ・加賀爪 優・諏訪 康雄・江草 忠敬
『概説オーストラリア史』 有斐閣、1988

新村 出 『広辞苑』第五版、岩波書店、1998

西野 春雄・羽田 昶 『能・狂言事典』 平凡社、1987

野上記念 法政大学能楽研究所 『世界の中の能 - 法政大学第四回国際シンポジウムの記録』法政大学、1982

宗片 邦義 『日英二ヶ国語による「能オセロー」創作の研究』 勉誠社、1998

Ueda, Kuniyoshi

NOH ADAPTATION OF SHAKESPEARE—Encounter and Union, HOKUSEIDO, 2001

その他

Department of History, University of Queensland, Manuscript received February 1977

Fraser Island Occasional Paper in Anthropology Number 8

Department of Women's Studies University of Adelaide, 25 and 26 November 1995

Marett, Allan *ELIZA* 上演パンフレット 1989, 9月5日 配布分

POST-COLONIAL FICTIONS: Re-reading *Eliza Fraser and the Wreck of the 'Stirling Castle'*,
Symposium, (宣伝用パンフレット)

インモース、トーマス著、尾崎 賢治訳 『変わらざる民族 演劇・東と西』南窓社、1972

表 章・加藤 周一、『芸の思想・道の思想 - 1 世阿弥 禅竹』岩波書店、1974

芸能史研究会 『日本芸能史』第3巻 - 中世、法政大学出版局、1983

- 金関 猛『能と精神分析』平凡社、1999
- 相良 亨『世阿弥の宇宙』ペリかん社、1990
- 白洲 正子『世阿弥 - 花と幽玄の世界』講談社、1996
- 新書編集所『人間と文化』40、三愛会、1981
- 鈴木 慶雲『続・能の面』わんや書店、1970
- 世阿弥作、野上 豊一郎・西尾 実 校訂『風姿花伝』岩波書店、1958
- 成 恵卿(ソン・ヘギョン)『西洋の夢幻能 - イエイツとパウンド』河出書房新社、1999
- 多田 富雄『脳の中の能舞台』新潮社、2001
- 津村 禮次郎『能がわかる100のキーワード』小学館、2001
- 服部 幸雄・末吉 厚・藤波 隆之『芸能史 体系日本史業書』21、山川出版、1998
- 林屋 辰三郎・岡田 譲『「日本文化の歴史」 第8巻「阿弥と町衆」』学研、1969
- 藤城 繼夫 文、亀田 邦平 写真『能への招待』、わんや書店、1973
- 藤城 繼夫 文、亀田 邦平 写真『能への招待』、わんや書店、1975
- 丸岡 大二・吉越 立雄『能 観賞のために』保育社、1985
- (社)国際演劇協会日本センター、『THEATRE YEAR-BOOK』1996、(社)国際演劇協会日本センター、1996
- (社)国際演劇協会日本センター、『THEATRE YEAR-BOOK 2001 Theatre Abroad - 諸外国の演劇事情(社)国際演劇協会日本センター、2001
- (社)国際演劇協会日本センター(ITI ユネスコ) / *I. T. I. News* No.96 国立能楽堂、1999年10月
- (社)国際演劇協会日本センター(ITI ユネスコ) / *I. T. I. News* No.100 国立能楽堂、2000年1月
- (社)国際演劇協会日本センター(ITI ユネスコ) / *I. T. I. News* No.102 国立能楽堂、2000年12月

ビデオ映像資料

- 作マレット,アラン 作曲 エマート,リチャード 作舞 松井 彬“能イライザ”東京公演、梅若能楽院会館、1990年
- Gillian Coote,“Island of Lies”, Documentary on Eliza Fraser and aboriginal massacres,1989
- Marett, Alan.“Eliza”, produced by Matsui, Akira. Emmert ,Richard. with Sydney University Students, 1989
- Seymour centre performance of “Tamakazura”,”Kantan”
- “Kiyotsune””At the Hawk’s Well”, University of Sydney,1989

ウェブサイト・アドレス

市報わかやま 11月号4

http://www.hall.city.wakayama.wakayama.jp/13_shihou/13/11/page/200111_4.htm 2003年11月12日訪問

東芝ダイナブック・ホームページ

<http://dynabook.com/pc/museum/insight/004/body1.htm> 2003年10月20日訪問。

Australian Archaeological Association, FACULTY OF ART<MONASH UNIVERSITY

http://www.arts.monash.edu.au/ges/arch/book_colonial.html 2003年9月1日訪問

Australia's Universities, Australian Vice-chancellor's Committee

http://www.avcc.edu.au/australias_unis/individual_unis/ 2003年5月3日訪問

“Fraser Island”

<http://www.fortunecity.com/millennium/puppet/756/2afraser.htm> 2003年10月1日訪問

“Fraser Island is a special place”

<http://www.shellbybayresort.com.au/fraserisland.html> 2003年10月1日訪問

LATROBE UNIVERSITY

<http://www.latrobe.edu.au/> 2003年7月2日訪問

Noh, search, Yahoo! Australia & NZ

<http://au.search.yahoo.com/search/aunz?p=Noh+> 2003年3月1日訪問

Perth International Arts Festival 2003-Perth, West Australia

http://www.perthfestival.com.au/2003_archive/NohTheatre.html 2003年6月15日訪問

“The Rescue of Elizer Frazer”, NoosaNet

<http://www.noosanet.com.au/history/elizerfraser/> 2003年10月1日訪問

Walkabout,Australian Travel Guide

<http://www.walkabout.com.au/locations/QLDFraserIsland.shtml>